

ネパールの体育教育の実情 (IX)

— NGO 支援プログラムのケーススタディーを中心に —

松岡重信
(広島大学)

I. 緒言

第9報に至る本研究の目的は、ネパール王国の体育やスポーツの実情を可能な限り正確に報告し、記録することである。従って、ネパールであろうが、ブータンであろうが途上国の様子などに格別に関心のないむきにとっては余り意味のある報告にならないという可能性は常に感じている。それでも、本年10月に開催された「第51回日本体育学会」において、ミャンマーの体育事情についてのレポートとかが始めている。かつて、欧米にしか向いていなかったわれわれの視線が途上国に向けられるその理由の最たるものは、興味といえばそれまでであるが、別の観点が設定できる可能性もある。例えば、こうした途上国のレポートは常にわが国との違いや劣悪な状況の解説に終始しがちであるが、そしてそれも事実関係には違いないが、異なった観点設定の可能性である。例えば、「カリキュラム研究」や「教科にからむ学力研究」と政治経済状況や当該国の文化水準等との関係であり、またそれらの変化状況との関係性である。もっと大きさにいえば、「学校制度」そのものも含めて、「体育科」や「保健体育科」の成立や改革についての素朴な歴史が読みとれる可能性がある。世界に於ける素朴な教育制度の形成過程において、現実的には如何なる要件が整ったり、いかなる条件の変化があると、実質新しい教科が誕生したり、消滅したりの変化をたどるのかという歴史的・社会的な視点に大いに興味がある。

今回は、本年2000年1月の8度目の訪問と、その活動内容から副題に示す東広島ユネスコ(会員数48名、法人会員1社)が、支援協力を開始して6ヶ年目を迎えようしているアマルシッダ高等学校(モデル・ハイスクール)の、その後について報告するという形をとりたい。なお、あとでもふれるが、インターネット情報でネパール支援やNGOの歴史をまとめている野崎らによれば、学校建設や教育を含め植林・医療に限らず最近の10年でも2000近い日本人の組織や個人がネパールにかかわっている。このかかわりに関する評価も、さほどいいものばかりではなく、建物は建てたがほと

んど利用されていないとか、学校として建設された建物が物置になっているとかの話はよく聞かされることである。この典型例は、今回のネパール訪問の行程が、帰国間際に飛行機が故障してキャンセルとなり、非常に混乱した状況のなかで、全く偶然に知り合った団体との情報交換で実感させられる事例を知ることができた。これについては後に報告する。

さて、最低10カ年は支援を継続するという上記東広島ユネスコの支援スタイルはまれにみる長期的スタンスをもっており、おそらく今後もつづくと思われる民間支援やNGO活動の1つのモデルになるだろうという期待もあり、今後も数年おきに密着して観察を続ける予定である。

II. NGO 東広島ユネスコクラブの支援活動の概略

東広島ユネスコ協会は高橋龍子(84才、内科医)を会長としてNGOを名乗る団体である。本部を東広島市におき、会員数48名で様々な活動を展開している。組織的には県ユネスコや、国の機関である国内ユネスコ委員会とも連動しているが、経済的には独立性の強い団体と把握できる。この団体の性格や特徴は必ずしも明確には把握できていないが、他の女性団体とも会員間では連動しており、6年前に開始されたベグナス村(アマルシッダ・モデルハイスクール)支援もかなり慎重にして、かつ大胆な援助活動を10年間継続しながら、徐々に現地の人々の「自立」を促すという目論見をもっている。

そして、先にもふれたように1995年から当地ベグナスの高校を中心にして、教育のみでなく、全村的な生活向上を念願して支援協力活動を継続している団体であり、初期的な状況については、既に本学会に同一テーマの第5報として1996年にレポートしている。この団体のこれまでの活動経緯を側聞したり、実際に訪問して、これまでに危機的状況があったとされる。初期的なつまづきで、今日的には解消されているが典型的な事件であったことには間違いない。それは、当ユネスコが、初年度にまず「文化会館」を建設して、図

書館機能や医務室機能、また会議室機能などを付加し、また管理人を1人専従で採用して運営に当たらせていた。そして、この会館の管理や生かし方を「会館運営委員会」に委託して、この運営委員会のトップに地元の有力者を当てていた経緯がある。ところが、そのトップの彼が地元の議員選挙に出るために、運営委員会の資金もユネスコが建設した会館の鍵ももったまま行方をくらませる事件が発生した。選挙運動に奔走し、会館事業を省まないという事件である。この一件は、われわれが3度目のネパール訪問時に時間的余裕があって、何の前触れもなく突然この高校と文化会館を訪問したことがある。この時、やはりこの会館は管理人も不在で、会館に鍵がかかったままの状態であったことと符合する。モデルスクールの校長（今の会館のHeadmasterで Samalal Tiwari 氏）が対応してくれたが、およそ初期的に期待されていた活動が全く行われていなかった事実がある。年限的にはこの問題は時期的には連動していて、金も会館の鍵も一人のポストに支配されていて運営のしようもなかった時期が一時的にあった苦い経験をもっている。この年のユネスコ訪問団も含めた運営委員会で彼を罷免し、別の運営委員会を組織した。そして、現地在住の日本人が相談役につくという体制を再組織して立て直したという。ここで、これまでの東広島ユネスコのネパールにかかわる6年間の歩みを表1に整理しておく。これは東広島ユネスコが年に数回発行している会報（2000年特集6号）を参考にして整理したものである。

筆者自身はこのNGO東広島ユネスコクラブに同行してネパールを訪問するのはまだ2度目であるが、無理のない、しかも参加者がベグナスの支援活動のみでなく、つまり他にもネパールを訪れる楽しみをもって訪問している事実がある。ある婦人は現地での買い物を楽しみにしていたり、山に近づく観光を楽しみにしていたりである。例えば、今回の訪問団同行が2度目という女子高生は現地校で「折り紙」を指導する約束をしていたり、別の婦人は「毛糸の編み物」を教えることを数年目で継続していたりする。訪問団参加者が個々個別にモデルスクールの子ども達・生徒たちと連携している。それぞれに、昨年教えたことが今年はどうなっているか…等を楽しみにしながら、日本から折り紙用紙や毛糸を準備して、言葉の壁など問題にしないプログラムの活動を行っている。それらの指導風景に接していると、ユネスコとしてのフォーマルな支援協力活動とともに、参加者個人が個別に課題や楽しみ事を持っていることも、支援が長続きする一つの秘訣かと考えたりする。表1はこれまでの5カ年のユネスコの取り組みの概略であり、スポーツ事業も初年度

表1 ユネスコによる支援プログラム

年月	支援内容	必要経費
1994～1995	準備交渉と募金活動、確約書の交換	(3,322,285円)
1996.1	文化会館建設(建物面積90平方m) 1F:多目的ホール、2F:図書館、保健室、スポーツ用具、事務室、3F:裁縫教室(後に増設) 健康診断、教育神社建設、ミシン5台購入、スポーツプログラム(バレー・バドミントン・ドッジボール)始動	(1,538,277円) 合計238万円
1997.1	図書館拡張(新刊本追加)、裁断机、黒板、指示板等購入 薬代少額徴収開始、識字教育修了者女性25名	(1,499,247円)
1998.1	裁縫技能一般女性修了者増加、女子学生も7人修了 識字教育修了者女性20人、飲料水タンクと水場設置	(1,329,530円)
1999.1	バスケットボール設置、アイロン購入、ミシン計12台に 地域の調査(勉強希望者384人)、地域識字教育開始	(1,085,819円)
2000.1	バスケットコートの整備、図書館147人の生徒40人の保護者がカードを利用して使用、裁縫6ヶ月ミシン訓練 17名の女性が参加して7名が修了、地域21名の識字教育、衣類の仕立て販売計画(2ヶ月で2400円の収入) スポーツを重点内容にしてい	(1,156,576円)

からスタートしている。たまたま活動を披露してくれたバレーボールでは、高校の年長の生徒達の活動ではあったが「これは立派!」という印象で、3段攻撃が十分に成立しており、トスアップがアタックに繋がりが、またそのアタックがひろわれて繋がっていくゲームが展開していく様子が観察できた。このような技術的な問題は、外見的にはごまかしようもない。週当たりの練習頻度まではわからないが、日常的にバレーボールが実施されている証拠ともいえる風景であった。



写真1 モデル校におけるバレーボール風景

III. 10年プロジェクトの追加事業内容と評価

東広島ユネスコの支援活動やそのプログラムの概略を先に報告したが、これらはいずれもコーディネータを介しての相談や年1回のフォーマルな会議で決定して実行されてきた。それでも現実には経済的基盤を必

要としている。また、先にもふれたが支援協力期間が10年で設定されている。従って、実質5年が経過して、いよいよ後半にはいる来年より支援金額を減少させ、より現地の人々の自立を高めて欲しい旨を伝えねばならず、事務局も緊張していた。心配された通り、その事が運営委員会で事務局より表明されたとき、たまたま会員でもない筆者も同席していたが、何とも言えぬ雰囲気は漂い、十数名の会館運営委員からため息とも不満ともつかぬ声が漏れていた。ユネスコ支援に依存していることの証拠かもしれない。文化会館の運営についても、学校のメンテナンスや、スポーツ用品の追加や医薬品の追加にしても基本的にはその費用を必要とする。今は、東広島市での現物寄付も少しはあり、必ずしもすべてが現金で購入されている訳ではないが、これも何時までも続くという保証はない。

逆に言うと、この学校や地域への投入資金は、日本での「一般募金(表1の()の金額)」は、事務経費を別にしても年間100万円を超える金額が集まっている。東広島ユネスコは、その活動を地元新聞やミニコミ紙、テレビ特番などで公表し、周辺に理解とカンパを求めており、また、それが評価されていることもあって結構金を集めることができる状態があった。また、組織は別であるが、加藤らが主催する「ナマステ・バンド」のコンサートからの収入年間十数万円に加えて、若干の篤志家からの寄付金等が一般募金にあてられている。このような状況からみて、決してあり余る資金があって、それが湯水のごとく投入されているという訳ではない。また、こうした支援協力が長期化すると、次第に周辺が興味をなくす…ということもあり得るわけで経済的側面だけでなく、現地で事業を興し地域ぐるみで多少なりとも現金収入の道を探るといった現地的発想も「自立」を図るという長期的な支援目標からみれば必要になる。表2は1995年当初の計画に加えて展開されている事業で、目下そうした路線で動いているプログラムはここに記載していないが「貸しポート事業」で、これはかなり実効性が評価されている。すなわち、付近にある大きな湖に観光用のポートをおいて、これを地元の子供も達で管理させて収入を得る事業である。さらに「ミシン裁縫事業」をテスト的に運営している。側聞するところでは、内訳は理解できていないが、「文化センター名義」として約50,000Rsの預金が貯まっているとのことである。なお、この50,000Rsは日本円にして約10万円になり、大人ひとり月給がほぼ3,000円ということから推測して欲しい。また、それ以外に実施されている事業は概略表2のように整理できる。

表2 東広島ユネスコの事業内容とその概略的評価

事業項目	その評価
・育英奨学金制度	4名(男3,女1)の成績優秀者に支給しており、効果が上がっている。
・家庭識字事業	学校に通学している子どもを教師役にしての母親の文盲克服事業で現在21名に試験実施中である。
・スポーツ事業	学校の校庭を中心にバレーやバスケ・バドミントン、文化会館の1Fで卓球などが展開される。目下は生徒達に限られているが、特にバレーの場合、学校制度のズレを考えてもかなりうまく、三段攻撃はほぼ完成している。これは僅一部のうまい生徒がやっていたにしても素朴に驚きであった。
・保健衛生事業	「健康診断」を実験的に実施し始めている。

IV. モデルスクールの生徒数変動から

ネパールではまだ学校制度自体が十分に確立されていない。都市部は私立の学校も多く、また就学率も高いが、郡部の状況はかなり劣悪である。このモデルスクールは、その意味ではネパールでも有数といわれる観光地ポカラからバスで約1時間の場所の近郊という位置関係にあり、さほど田舎という訳ではない。が、日本的な風景としてみれば、この地域は美しいベグナス湖などの風景をもつ一方で、山肌へばりついた小さな山村で、どの家でも小さな段々畑と、家畜として山羊や鶏・牛が飼育されている。学校区という行政的しぼりは無いというか、きいていないようで、ここ5年間の生徒数の変動も支援の効果の傾向を把握する一つのパラメータになると考える。

まず、合計としての学校の生徒受入数は95年度に480名から99年度には638名に増加している。日本的な習慣とまるで異なるところは、小学生も高校生も一つの敷地に同居しての数字で、なお、一般的にも多くの場合、二部制的な授業展開でしのいでいる。「早番」とか「午後番」と言われるように朝7:00ぐらいに登校する生徒と、昼頃入れ替わりに登校する生徒に分けて運営されている。97年度に、村が寄付して(土地と労働と金)3教室分を増設しているが、この学校の周辺での評判が高くなって生徒数が増えているというこ



写真2 ベグナス村の遠景

表3 アマルシッダモデルスクールの生徒数の変動

学年	95年	96	97	98	99	
小学校	1	109	100	93	100	72
	2	61	57	58	73	73
	3	51	43	51	56	61
	4	38	51	46	50	56
	5	29	37	56	45	61
中学校	6	57	58	60	64	78
	7	49	52	51	58	77
	8	35	54	54	60	59
高校	9	20	37	53	54	49
	10	31	21	35	49	52
合計	480	510	557	609	638	

とは以前にも報告した通りである。日本と同じように1年で進級していくとみなすと、斜め読みして95年の小学校1年生は109名で、96年には57人まで落ちて半減しているとみなせる。そして、99年には5年生で61名になって前年比較+11名といった数字上のマジックみたいな数字が観察される。しかし、これはマジックでも何でもなくて、「いけるときにしか学校はいけない!」、「親が学校へいくな!」という、といったことが季節変動だけでなく日常茶飯事にある。加えて、1年以上休んでも、またキリのいいところで復学すると行った自由度とご都合主義が観察される。従って、同じ1年生でも年齢的にはバラバラで、進級にかかわる細かいルールは確認できていないが、学校側にもご都合主義があると思われる。それで、なんとなくうまくいっているというのか、デタラメなのかかわからないが、これが現実の姿である。それだけに校舎を建て増ししてでも部分的に対応しているなどという現実はおそらく他の地域にはそう観察されないであろうと考える。

V. 地域支援や学校支援と「自立」への課題

最初にふれたが、今回の訪問時にインドのデリー空港を経て、カトマンズ空港発関西空港行きのロイヤルネパール便が機体故障のためにキャンセルされた。帰国間際でもあり、現地時間で夜中の12時を過ぎた混乱のなかで、結構多くの日本人グループと話す機会ももてた。中に静岡県から来ている中高齢の男性グループ8名と、ホテル情報や次の飛行機便の様子などを交換してしていたが、このグループもカトマンズ北部の村落地域に医療支援をしているグループであった。うちリーダー格は、元国会議員であったとかであるが、この人物の話を要約すると、今年で3年目を迎える事業が完全に暗礁に乗りあがろうとしていることを心配する。つまり、この村落地域に自主財源で病院を建設し、

日本人の医師と看護婦を駐留させている。その際、日本人医師と看護婦への手当が国内との2重払いで契約しており、国内分は別にして、現地給料が少なくとも年間300万円は必要になる。二重情報になるが、概算で日本円とネパールルピーは1ルピーが2円程度と考えれば理解がはやい。そして、医師と看護婦の日本人スタッフに払う現地給料約300万円というのは、日本ではともかくも、現地では莫大な金額ということになる。元国会議員氏によればその300万円が準備できない可能性が高まり、途方に暮れているという情報であった。後にHP情報で確認されたところでは静岡の済生会総合病院を中心とした活動と見受けられる。いずれにせよ、こうした支援の行き詰まり情報や、資金不足状態が2年もつづくと、たちまちに当初の目論見がゼロベース以下にもどってしまう可能性がある。また、特定の篤志家やスポンサーに依存した活動は、少しの状況の変化でたちまち活動停止に追い込まれる可能性があることを示唆している。この点、東広島ユネスコは決して無理な活動を展開していないし、集められた募金の範囲であまり金のかからないスタイルで事業をおこし、現地スタッフにまかせた運営を展開している。また、現地在住の和田正夫氏がコーディネーターとして、東広島市ユネスコとのコンタクトが頻繁で、かなり詳しい情報がユネスコに届くという仕組みをもっている。これは現実的な問題としても非常に重要なポイントだろうと考える。現地を知り尽くした人間が間にとってコミュニケーションをつなぎ、必要な事は何でも、用心すべきは何か、等の指導的かつ仲介的な役割を果たしている。こうした日本人がいるという点の強みは絶大である。

VI. NGO 支援活動にかかわる懸念材料

ただ、懸念される問題がないわけではない。例えば東広島ユネスコの会員全員の年齢までは把握していないが、現実を中心に動いているメンバーの年齢が相対的に高いこと、これはあと5年前後、そして年1回のネパール訪問団の結成にしても結構不安になるポイントである。さらに厳しい現実、東広島ユネスコクラブの会長であり、他の団体の運営に深く長くかかわってきた高橋龍子医師が12年10月31日に急死という訃報にみまわれている。享年84才という高齢ではあったが、かくしゃくとした女性リーダーで、地域の顔役でもあった。自らも3度ネパールに脚を運んでいる人物で、この人物の急な逝去の影響は、これから表面化すると思われるが、相当のものであろうと推測できる。

もう1点はインターネットでも確認されることであるが、治安や安全性にかかわる問題である。外務省が

発表している海外渡航に関する情報では危険度1「注意喚起」～3「渡航延期勧告」で、中西部も西部も結構危険であるとされている。この状況は、つい2～3年前と比較すると例えようもなく変化している。これまでにに関して言えば、ネパールは格別に貧しい国ではあるが、また格別に治安状況のいい事で知られる国であった。ところが、あちこちでゼネストがあり、飛行機もバスもタクシーもリキシャも止まる。何時動き出すかというような情報もほとんどない。西部の街や農村部で暴動問題が発生していたり、特に中西部・西部・極西部の郡部において「マオイスト」と呼ばれる集団の社会運動や、旅行者を襲う襲撃事件、警察と衝突する暴徒集団、さらにカトマンズ市内の観光地に住むストリート・チルドレンなどの報告も相次ぎ、相当に治安状態が悪化している。この治安問題は、いま現在で現地ポカラやベグナス村に及んでいる訳ではないが、非常に懸念される問題である。直接的には観光客の減少も懸念され、短期的に経済的悪循環に陥る可能性も秘めている。

VII. まとめ

途上国を巡る経済格差・貧富の差は必然的に衝突や混乱に至る可能性とエネルギーをもっていると考えている。ある種の経済的・政治的対立と混乱の歴史を経なければ、真に民主化とか富の配分の合理化などは獲得できないとすれば、今後の政治状況や経済状況から目をそらす訳にはいかない事情が生じる。ネパールの民主化は、王政から kongress と呼ばれる（ネパール会議派）議会政治への転換点とされるが、それは1990年ということになる。そこから換算してもさほどの年月が経過していない。記憶をたどると、第2回目のメパール訪問（1994）時にも、カトマンズ周辺のキルティプールという地域の学校を訪問した折りに、あちこちの民家や神社の壁にカマとハンマーの図案が描かれていたことを思い出している。このモデル学校にしても、今回発行された「スマーリカ記念誌」によると、ネパール歴の2020年に村の議会で学校設立を決めて資金計画をたてた時点からの始まりで、学校自体が30年程度しか経過していない。それも中学校・高等学校を年次計画通りにもつくれなかった背景をもつ地域である。支援協力の必要性とか、相手からの要請とかは、これからもユネスコで議論されるのであろうが、国の政治状

況についても把握している範囲のことは記録しておきたいと思う。

90年の民主化革命は、それまで優勢であった中央集権的なパンチャヤット制と呼ばれる政治体制が kongress 派に変わったという基本的な図式がある。パンチャヤット制を打ち壊すに際しては、kongress 派と共産党は協力体制にあったが、議会派に変わったとき、制定された憲法の評価を巡って kongress と共産党が大きく対立して、その図式が地方にも波及している。マオイストとよばれる社会運動のグループの動きもその一つである。暴動化して警察だけでは手に負えず、軍隊の投入も議論されつつあると金田（2000.10）は報告している。

目下の政治情勢や社会情勢を総合的にみて懸念材料も多く、また東広島ユネスコ自体も高齢化や会長の急死といった事情の変化がある。インターネット上でネパールに関する NGO 活動の転機を訴える野崎泰志（日本福祉大）は「ローカル NGO」や「空き缶シンドローム」とか「亡命型 NGO」と揶揄するように、多くの善意ある人々や団体の支援活動が「砂漠に一時的に水をまいた状態」になる恐れは十分にあるといえる。「空き缶シンドローム」とは、多くの学校団体がやる支援のスタイルで、空き缶の廃品回収で、数年かけて50～100万円の収入を得て、その金でネパールに学校を…というようなスタイルである。野崎は、こうした NGO の活動が組織的には3つの段階を踏むと分析しており、初盤での失敗は多くのケースでクリアできるが、中盤での体力ぎれとか、資金調達の高難しさで組織内部に亀裂がはいりやすいことを指摘している。脱落者が出やすいのもこの段階としているが、東広島ユネスコは今まさにこうした中盤状況に当てはまる可能性が高いのではないかと推測している。そして、NGO の円熟した段階にいたるためには、現地 NGO との連携だけでも不可能で、常駐して指導できるスタッフの必要性を説いている。

途上国支援や協力というものは、それを生かすという観点からみれば、さほど簡単でもなければ、金さえあればというものでもないことを改めて感じつつある。

【参考文献】

- ①東広島ユネスコ発行：2000年第6号
- ②東広島ユネスコ発行：「スマーリカ記念誌」